

## 初動 DMAT 活動記録

長岡赤十字病院 3A 海發 悟

～～～人と人とのつながりの大切さを実感した～～～

震災当日に DMAT として出動し、南相馬市で患者搬送の任にあたった。その後、新地町で救護活動にあたったが、原発事故に伴い、撤退することに。大きな災害に対して人間一人の力はあまりにも小さいが、ともに協力することで初めて結果を残すことが出来ると思った。

3月11日、病棟で激しい揺れを感じた。病棟の被害状況を確認中に患者様のテレビで東日本大震災の発生を知った。『DMAT が出るかな』と思い、すぐに出動準備に入らなければと考えた矢先に病棟の電話が鳴り、「DMAT が出ます。行けますか」とのこと。

災害発生時のために勉強・訓練をしてきて覚悟しているつもりだったが、いざ実際の出動となると様々な不安が頭をよぎった。迷う時間はなく「行きます」と返事をした。

仕事を病棟スタッフへ依頼して妻へ連絡、装備を準備して病院の救急車とワンボックスカーの2台で出発した。高速道路の安全状況が確認されておらず、津川 IC でしばらく足止めされた。集まってくる新潟県内から出動した消防や医療班の何十台もの緊急車両を見て、改めて『大変な事が起きているんだ』と実感し、それとともに知り合いの救急救命士や他院の DMAT 隊員と顔を合わせて心強く感じた。

福島市内では建物被害は見当たらないが渋滞がひどい。救急車の赤色灯とサイレンを鳴らして渋滞をすりぬけた。参集拠点である福島県立医大に着いた時には夜になっていた。

DMAT 本部にはすでに参集したチームが各地の病院に被害状況の確認作業を行っていた。作業を手伝いつつ、テレビ画面で各地の津波被害や燃え上がる気仙沼の地獄のような報道映像を見ながら、恐怖を感じた。

初めの任務は南相馬市立病院から福島県立医大への患者搬送だった。南相馬市立病院へ停電で真っ暗な道に向かった。病院に着き、津波にのまれて全身傷だらけの患者様を救急車へ乗せた。家族へ「一緒に乗ってください」と声をかけると、「まだ見つかってない家族が

いるんです。探さなければならぬので一緒には行けない」と辛そうな表情だった。患者様は搬送中、閉眼して言葉も少なかった。「寒くないですか、痛みは大丈夫ですか」と声をかけることとバイタルサインの測定を繰り返した。

患者様の気持ちを考えると他にどんな言葉をかけていいのかも分からなかったが、少しでも安心してほしくて、搬送中ずっと傷の少ない肩や手に自分の手をそえていた。無事に福島県立医大に送り届けたときには深夜2時を過ぎていた。不思議と全く疲労を感じなかったが次の任務に備えて救急車の中で仮眠をとり、夜明けの光で目が覚めた。

3月12日は朝から待機状態が続いて、その時間がもどかしくて長い時間を感じた。そこで DMAT から日赤救護班へ転換し、福島県の海岸線の新地町へ向かった。

海岸に近付き津波の痕跡を目の当たりにした。役場に救護所を設営し、避難所の巡回診療を行った。高齢な避難者が多く常用薬をなくした。夜眠れなくて血圧が高いというような方が非常に多かった。巡回診療を終えて役場の救護所へ戻ると、町長が先生に話があると険しい表情でやってきた。町長は「福島原発が爆発しそうで、もうもたないそうです」と話した。実際、新地町は原発から北に50kmほどのところにある。爆発の程度や被害は報道にあった通りで死ぬほどの危険ではなかったが、側で話を聞いて、『ここは原発からどのくらい離れているのか、爆発したらどうなるのか、死ぬのか、こんなところで死んだら家族に申し訳ないな』などと考えた。頭が真っ白になって全身の血の気が引くのを感じた。その後もう一か所避難所を巡回して、撤退す

ることになった。

その日に会ってお話をした被災者の方たちの顔や言葉を思い出して、情けなくて悔しい気持ちだった。避難所を出る車の中で、撤退する後ろめたさと残されていく現地の被災者の方々のことを思うと、周りを歩く被災者の方たちの顔をまともに見ることができず目を伏せた。原発から逃げるように北上し、20時過ぎに宮城県白石市役所へ到着した。

市役所でカップ麺とおにぎりをいただいて、久しぶりの暖かい食べ物でほっとした。そのときまで、その日に何も食べていないことに気付かなかった。その日は車の中で翌朝まで熟睡した。

3月13日、市役所にdERUを設置し、新潟へ帰ることが決まって昼に市役所を出発し、帰院した。今回、初動救護での3日間は、多くの人たち

に支えられて活動させていただいて、人と人のつながりの大切さを実感した。大きな災害に対して人間一人の力はあまりにも小さいが、ともに協力することで初めて結果を残すことが出来るんだと思う。もう、こんな辛い災害は起こってほしくないが、今後自分が現役の間に無いとは言えない。

今後の自分の心構えとして、平時から周りとのよい関係を築いておく事、災害が起こった時の協力体制を確認しておく事、共通の考えで災害救護活動を行うための知識とコミュニケーション能力を高めておく事が自分の課題と考えている。

最後に、一緒に出動した仲間、出動先でも活動した皆様、後方支援や病棟の業務を変わっていただいた病院スタッフのみなさん、心配をかけた家族へ、「本当に感謝しています。ありがとうございました。」